

カラーユニバーサルデザインチェックリスト

基本となる考え方

- 色による情報伝達は、すべての人に共通するものではないという意識を持つ。
- 色の違いだけでなく、明度や彩度の違いや、書体、太字、傍点、下線、囲み枠、形状の違い、文字の記号の併用など、色に頼らなくても情報が得られるように工夫する。
- 線や文字に色をつけるときは、色の面積を少しでも広くし、色の区別がつきやすいようにする。
- 色の名前を用いてコミュニケーションが行われる可能性がある場合は、色の名前を記載する。

色の選び方・組み合わせ方

- 明るい色と暗い色を対比させる。
- 彩度の低いパステル調の色同士を組み合わせない。
- 背景と文字にははっきりとした明度差(コントラスト)をつける。
- 細い線や小さい文字には、「黄色」や「水色」などの明るい色を使用しない。
- 「濃い赤」は「黒色」や「こげ茶色」と見分けにくい。「赤色」と「黒色」を組み合わせる場合は、「濃い赤」ではなく「橙寄りの赤色」を使用する。
- 「緑色」は「赤色」や「茶色」と見分けにくい。「赤色」や「茶色」と見分けやすくするためには、「明るい緑色」や「青みの緑色」を使用する。
- 「黄緑色」は「黄色」と見分けにくいので組み合わせない。
- 「明るい黄色」は、白内障の人には「白色」や「クリーム色」と見分けにくいので、いっしょに使用しない。
- 「黒色」「青色」「緑色」などの暗い背景の上に、「赤色」で文字を書くと文字が読みにくい。背景の色を変えられない場合は、文字色を「白色」「黄色」「クリーム色」などの明るい色にする。

色以外の工夫

- 色の塗り分けには、色以外にハッチング(網掛け)などを併用する。
- 色の塗り分けの境は、細い黒線や白抜きの輪郭線を入れて、色同士を見分けやすくする。
- 申請書などの紙を色で区別している場合には、その紙の色が分かるように色名を明記する。